

歌行燈

泉鏡花作

一

宮重大根のふとしく立てし宮柱は、ふるふきの熱
田の神のみそなはず、七里のわたし浪ゆたかにして、
來往の渡船難なく桑名につきたる悦のあまり・・・

と口誦むやうに獨言の、膝栗毛五編の上の讀初め、
霜月十日あまりの初夜。中空は冴切つて、星が水垢
離取りさうな月明に、踏切の棧橋を渡る影高く、灯
ちら／＼と目の下に、遠近の樹立の骨ばかりなのを
視めながら、桑名の停車場へ下りた旅客がある。

月の影には相應しい、眞黒な外套の、痩せた身體
に些と廣過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、眞新
しいは扱て可いが、馴れない天窓に山を立て、錨
をしつくりと耳へ被さるばかり深く嵌めた、剩へ、
風に取りられまいための留紐を、ぶらりと皺びた頬へ
下げた工合が、時世なれば、道中、笠も載せられず、

と斷念めた風に見える。年配六十二三の、氣ばかり
若い彌次郎兵衛。

然まで重荷ではないさうで、唐草模様の天鵝絨の
革靴に信玄袋を引搦めて、這個を片手。片手に蝙蝠
傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒
汲みかはして、……と本文にある處さ、旅籠
屋へ着の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾け
て參らうかな。(何うだ、喜多八。)と行きたい
が、其許は年上で、些とそりが合はぬ。だがね、家
元の彌次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴
の喜多一八にはぐれて、一人旅のとぼ／＼と、棚か
らぶら下つた宿屋を尋ねあぐんで、泣きさうに成つ
たとあるです。處で其許は、道中松並木で出来た道
づれの格だ。其の道づれと、何んと一口遣らうでは
ないか、えゝ、捻平さん。」

「また、言ふわ。」
と苦い顔を澁くした、同伴の老人は、まだ、其の
上を四つ五つで、やがて七十なるべし。臘虎皮の鍔

なし古帽子を、白い眉尖深々と被つて、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた鬱金の風呂敷、眞中を紐で結へた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手に一つ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしやんとした、人柄の可いお爺様。

「其の捻平は止しにさつしやい、人間きが悪うて成らん。道づれば可けれども、道中松並木で出来たと言ふで、何とやら、其の、私が護摩の灰でゞもあるやうに聞えるぢや。」と杖を一つ丁と支くと、後の雁が前に成つて、改札口を早々とする。

故と一足後へ開いて、隠居が意見に急ぐやうな、連の後姿をじろりと見ながら、
「それ、其處が其れ捻平さね。松並木で出来たと云つて、何もごまのはひには限るまい。尤も若い内は遣つたかも知れんてな。はゝは、」

人も無げに笑ふ手から、引手繰るやうに切符を取られて、はつと驛夫の顔を見て、きよとんと生眞面目。

成程、此の小父者が改札口を出た殿で、何をふら／＼道草したか、汽車は最う遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のやうに月下に吐いて、眞蒼な野路を光つて通る。．．．．

「やがて爰を立出で辿り行くほどに、旅人の唄ふを聞けば、」

と小父者、出た處で、けるりとして又口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。．．．．

時雨蛤 みやげにさんせ

宮のおかめが、．．．．ヤレコリヤ、よ

ヲしよし。」

「旦那、お供は何うで、」

と停車場前の夜の隈に、四五臺朦朧と寂しく並ん

だ車の中から、車夫が一人、腕組みをして、のつそり出る。

これを聞くと彌次郎兵衛、口を捻ぢて片頬笑み、

「難有え、圖星と、云ふ處へ出て來たぜ。が、同

じ事を、これ、（旦那衆戻り馬乗らんせんか、）

と何故言はぬ。」

「へい、」と言つたが、車夫は變哲もない顔色
で、其のまゝ棒立。

二

小父者は外套の袖をふら／＼と、酔つたやうな風
附で、

「遣れよ、さあ、（戻馬乗らんせんか、）と、
後生だから一つ気取つてくれ。」

「へい、（戻馬乗らんせんか、）と言ふでござい
ますかね、戻馬乗らんせんか。」

と早口で車夫は實體。

「はゝはゝ、法性 寺入道前の關白太政大臣と言
つたら腹を立ちやつた、法性 寺入道前の關白太政
大臣様と来て居る。」
と又アハゝと笑ふ。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は極つた筈にして、委細構はず、車夫は取着
いて梶棒を差向ける。

小父者、目を据ゑて故と見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よヲしよし。」

「否、よしではない。」

と其處に一人つくねんと、添竹に、其の枯菊の縋
つた、霜の翁は、旅のあはれを、月空に知つた姿で、
「早く車を雇はつしやれ。手荷物はあり、勝手知
れぬ町の中を、何を當にぶらつかうで。」と口叱
言で半ば呟く。

「いや、先づ一つ、(よヲしよし、)と切出さ
んと、本文に合はぬてさ。處へ喜多一八が口を出し
て、(せうろく四錢で乗るべいか。)(馬士が、
(そんなら、ようせよせ。)(と言ひやす、馬がヒ

イン／＼と嘶う。」

「若いもの、其の人に構ふまい。車を早く。川口の湊屋と言ふ旅籠屋へ行くぢや。」

「え、二臺でござりますね。」

「何んでも構はぬ、私は急ぐに……」と後向きに掴まつて、乗つた雪駄を爪立てながら、蹴込みへ入れた革靴を跨ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外づしもしないで揺つて置く。

「一蓮託生、死なば諸共、捻平待ちやれ。」と、くす／＼笑つて、小父者も車にしやんと乗る。・・

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二臺、月に提灯の灯 黄色に、廣場の端へ駈込むと……石高路をがた／＼しなから、板塀の小路、土塀の辻、徑路を縫ふと見えて、寂しい處幾曲り。やがて二階屋が建つき、町幅が絲のやう、月の光を廂で覆うて、兩側の暗い軒に、掛行燈が疎に白く、枯柳に星が亂れて、壁の蒼いのが處々。長

い通りの突當りには、火の見の階子が、遠山の霧を
破つて、半鐘の形活けるが如し。・ ・ ・ ・ 火の用
心さつさりやせう、金棒の音に夜更けの景色。霜枯
時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達
は宵寝と見える、寂しい新地差掛つた。

輻の下に流るゝ道は、細き水銀の川の如く、柱の
黒い家の状、恰も獺が祭禮をして、白張の地口行
燈を掛連ねた、鐵橋を渡るやうである。

爺様の乗つた前の車が、はたと留つた。

あれ聞け。・ ・ ・ ・ 寂寞とした一條廓の、棟瓦に
も響き轉げる、轍の音も留まるばかり、灘の浪を川
に寄せて、千里の果も同じ水に、筑前の沖の月影を、
白銀の絲で手繰つたやうに、星に晃めく唄の聲。

博多帶しめ、筑前絞、

田舎の人とは思はれぬ、

歩行く姿が、柳町、

と博多節を流して居る。・ ・ ・ ・ つい目の前の

軒陰に。 . . . 白地の手拭、頬被、すらりと瘦
ぎすな男の姿の、軒の其の、うどんと紅で書いた看
板の前に、横顔ながら俯向いて、たゞ影法師のやう
に、ひひのがあつた。

捻平はフト車の上から、頸の風呂敷包のまゝ振向
いて、何か背後へ聲を掛けた。 . . . と同時に
彌次郎兵衛の車も、丁度其の唄ふ聲を、町の中で引
挟んで、がつきと留まつた。が、話の意味は通ぜず
に、其のまゝ捻平のが又曳出す . . . 後の車も
續いて駈け出す。と二臺が一一寸摺れ／＼に成つて、
すぐ舊の通り前後に、流るゝやうな月夜の車。

お月様が一寸出て松の影、

アラ、ドツコイシヨ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたやうに、霜を切つて、唄ひ棄てた。．．．．． 餛飩屋の門に博多節を弾いたのは、轉進を少々縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、其の柄で弾くやうにして、灰のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯気の裏へすつきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うつかり聞惚れて居た亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立つて、

「出ないぜえ。」

は、づるいな。．．．．． 案ずるに我が家の門附を聞徳に、いざ、其の段に成つた處で、件の（出ないぜ）を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、大分狼狽へたものらしい。尤も居合は

した客はなかつた。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、
三味線を斜にずつと入つて、

「あい、親方は出ずとも可いのさ。私の方で入る
のだから。．．．ねえ、女房さん、そんなもの
ぢやありませんかね。」

と些と笑聲が交つて聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うつかり気を取
られて、釜前の湯気に朦として立つて居た。．．．
・浅黄の襷、白い腕を、部厚な釜の蓋に一寸載せ
たが、鬘をがつくりさした、色の白い、齒を染め
た中年増。此の途端に颯と臉を赤うしたが、竈の
前を横ツちよに、かた／＼と下駄の音で、亭主の膝
を斜交ひに、帳場の錢箱へがつちりと手を入れる。

「あゝ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戯だ、強請んぢやありません。此方が客だよ、

客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六疊ばかりの市松疊、其處へ上れば坐れるのを、釜に近い、床几の上に、ト足を伸ばして、

「何うもね、寒くつて堪らないから、一杯御馳走に成らうと思つて。え、親方、決して其の御迷惑を掛けるもんぢやありません。」

で、優柔しく頬被りを取つた顔を、唯見ると迷惑處かい、目鼻立ちのきりりとした、細面の、瞼に竄は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の人品な兄哥である。

「へ、へ、へ、いや、何うもな、」

と亭主は前へ出て、揉手をしながら、

「しかし、此のお天氣續きで、先づ結構でござりやすよ。」と何も無い、煤けた天井を仰ぎ、

帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂を一寸撫で、

「お銚子でございますかい。」
と莞爾する。

門かどづけ附てぬくひは手拭うへの上へ撥ばちを置おいて、腰こしへ三味線さみせんを小取ことり廻まはし、内端うちわに片膝かたひざを上げながら、床几しやうぎの上に素足すあしの胡坐あぐち。

ト裾すそを一つ搔か込んで、

「早速さつそく一合がふ、酒さけは良いのを。」

「えゝ、もう飛切とびきりのおつけ申まをしますよ。」

と女房にようぼうは土間どまを横歩よこある行き。左側ひだりがはの疊たゝみに据すゑた火鉢ひばちの中なかを、邪険じゃけんに火箸ひばしで搔かい掘ほつて、赫くわつと赤あかく成なつた處ところを、床几しやうぎの門附かどづけへずいと寄せ、

「さあ、まあ、お當あたりなさりますし。」

「難有ありがてえ、」

と鐵拐てつがに褌つまへ引挟ひっばさんで、ほうと呼吸いきを一つ長ながく吐ついた。

「世よの中なかにや、こんな炭火すみびがあると思おもふと、里心さとこころが付ついて尚ほ寒さむい。堪たまらねえ。女房おかみさん、銚子てうしを何どうかね、ヤケと言いふ熱爛あつかんにしておくんない。些ちつと飲のんで、うんと酔よはうと云いふ、卑劣ひれつな癖くせが付ついてるんだ、お察さつしものですぜ、えゝ、親方おやかた。」

「へゝゝ、お方かた、それ極熱ごくあつぢや。」

女房にようぼうは染そめた前歯まへばを美うつくしく、

「あい／＼。」

四

「時に何かね、今此家の前を車が二臺、旅の人を乗せて駈抜けたつけ、此の町を、・・・」

と干した猪口で門を指して、

「二三町行つた處で、左側の、屋根の大ききうな家へ着けたのが、蒼く月明りに見えたがね、彼處は何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございます、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。此の土地ぢや、まあ彼處一

軒でござりますよ。古い家ぢやが名代で。前には大きな女郎屋ぢやつたのが、旅籠屋に成つたがな、部屋々々も昔風其のまゝな家ぢやに、奥座敷の欄干の外が、海と一緒の、大い揖斐の川口ぢや。白帆の船も通りますわ。鱸は勿ねる、鮪は飛ぶ。頓と類のない趣のある家ぢや。處が、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊下や厠に點いた燈を消して、惡戯をするげに言ひます。が、別に可恐い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる。・・・時雨れた夜さは、天保錢一つ使賃で、豆腐を買ひに行くと言ふ。其も旅の衆の愛嬌ぢや言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、・・・お前様、此の土地はまだ何も知らない、さらんかい。」

「あい、昨夜初めて此方へ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」
と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣つたり！」

ほつ、

と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く。．．．．．恐しい利く唐辛子だ。
恚う、親方の前だがね、つい過般も此の手を食つた
よ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯
の皮が精々だらう。利くものか、と高を括つて、お
銭は要らない薬味なり、どしこと并へぶちまけて、
松坂で飛上つた。．．．．．又遣つたさ、色氣は無
えね、涙と涎が一時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかはり目を、ト掌で爛を當つた。
「お師匠さん、あんたは東の方ですなあ。」
「然うさ、生は東だが、身上は北山さね。」と
言ふ時、徳利の底を振つて、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさらうと言ふのか
な。」
「其れだ、と門口で斷られう、と亭主は其の段含ま
せたさうな気の可い顔色。」

「御串戯もんですぜ、泊りは木賃と極つて居まさ。
莫座と笠と草鞋が留守居。壁の破れた處から、鼠が
首を長くして、私の歸るのを待つて居る。四五四五

日は此の桑名へ御厄介に成らうと思ふ。・・・
上旅籠の湊屋で泊めてくれさうな御人品なら、御當
家へ、一夜の御無心申したいね、どんなもんです、
女房さん。」

「こんなでよくば、泊めますわ。」
と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動
かし、

「滅相な。」と帳場を背負つて、立塞がる體に
腰を掛けた。いや、此の時まで、紺の鯉口に手首を
縮めて、案山子の如く立ったりける。

「はゝはゝ、お言葉には及びません、餛飩屋さん
で泊めるものは、醤油の兩宿りか、か鯉節の行者だ
らう。」

と呵々と一人で笑つた。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいま
し。」

と女房は市松の疊の端から、薄く腰を掛込んで、
土間を切つて、差向ひに銚子を取つた。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「否いな、内うちぢや藝げい妓こ屋やさんへ出で前まばかりが主おもです
から、ごらんの通とほりゆつくりぢやえな。眞ま個ごにお師しし
匠やうさん佳いいお聲こゑですな。なあ、良あん人た。」と、横よこ顔がほ
で亭てい主しゆを流なが晒しめ。

「然さよぢや。」

とばかりで、煙たば草こを、ぱつ／＼。

「なあ、今いまお聞きかせやした、あの博は多か節たぶしを聞きいた
ればな、．．．私わたしや、ほんに、身みに染しみて、ぶ
る／＼と震ふるへました。」

五

「然う讚められちやお座が醒める、酔も醒めさうで遣瀬がない。たかゞ大道藝人さ。」

と兄哥は照れた風で腕組みした。

「私がお世辭を言ふものですか、眞實ですえ。」

あの、其の、なあ、悚然とするやうな、恍惚するやうな、緊めたやうな、投げたやうな、緩めたやうな、まあ、何んと言うて可からうやら。海の中に柳があったら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいやうな、……何んとも言ひやうのない心持に成つたのですえ。」

と、脊筋を曲つて、肩を入れる。

「お方、お方。」

と急込んで、譯もない事に不機嫌な御亭が呼ばはる。

「何ぢやいし。」と振向くと、……亭主何時の間にか、神棚の下に、斜と構へて、帳面を引繰つて、苦く睨み、

「升屋が懸は未だ寄越さんかい。」

と算盤を、ぱちり／＼。

「今時何うしたえ、三十日でもありません

に。……お師匠さん。」

「師匠ぢやないわ、升屋が懸ぢやい。」

「そないに急に氣に成るなら、良人、ちやと行つ

て取つて來い。」

と下唇の勿調子。亭主ぎやふんと參つた體で、

「二進が一進、二進が一進、二一天作の五、五

三六七八九。」と、餛飩の帳の伸縮みは、加減だ

けで濟むものを、醤油に水を割算段。

と釜の湯氣の白けた處へ、星の射てさうな按摩の

笛。月天心の冬の町に、恰もこれ困を吹込む聲す。

門附の兄哥は、ふと瘦せた肩を抱いて、

「あゝ、霧に響く。」……と言つた聲が、

物語を讀むやうに、朗に冴えて、且つ、鋭く聞え

た。

「按摩が通る……女房さん、」

「えゝ、笛を吹いてゝすな。」

「畜生、怪しからず身に染みる、堪らなく寒いも

のだ。」

と割膝わりひざに跪坐かしくまつて、飲のみさしの茶ちやの冷ひえたのを、茶碗ちやわんに傾かたむけ、ざぶりと土間どまへ、

「一ひとツ此奴こいつへ注ついでおくんな、其その方がお前まへさんも手数てすうが要いらない。」

「何なんの、私わたしは些ちつとも構かまふことないのですえ。」

「否いや、御深切ごしんせつは難有ありがたいが、薬罐やくわんの底そこへ消炭けしすみで、湧わくあとから醒さめる處ところへ、氷こほりで咽喉のどを挟さくられさうな、あのピイノ、を聞きかされちや、身からだ體たにひゞつ裂たけがはひりさうだ。……持もつて來きな。」と手てを振ふるばかりに、一息ひといきにぐつと呷あふつた。

「あれ、お見事みじと。」

と目めを三みつて、

「まあな、だけれどな、無理酒むりざけおしいなえ。澤山たんと、

あの、心配しんぱいする方かたがあるのですやる。」

「お方かた、八百屋やほやの勘定かんぢやうは。」

と亭主ていしゆ瞬またきして頤あごを出だす。女房にようぼうは面白おもしろ半分はんぶん、見返みかへ

りもしないで、

「取とりに來きたらお拂はらひやすな。」

「え、……と三百は三錢せんかい。」

で、算盤を空に弾く。

「女房さん。」

と呼んだ門附の聲が沈んだ。

「何んです。」

「立續けに最う一つ。而して後を直ぐ、合點かね。」

「あい。合點でございますが、あなた、豪い大酒ですな。」

「せめて酒でも参らずば。」

と陽氣な聲を出しかけたが、つと仰向いて眦を上げた。

「あれ、又來たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。．．．ヤ、そんなに未だ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、恁う．．．田圃の畔かとも思ふ處でも吹て居ら。」

と身忙しさうに片膝立て、當所なくニしながら、「音は同じだが音が違ふ．．．女房さん、どれが、どんな顔の按摩だね。」

と聞く。．．．其時、白眼の座頭の首が、月

に蒼あをざめて覗のぞきさうに、屋やの棟むねを高く見みた……

「あれ、あんた、鹿しかの雌雄めすきすではあるまいし、笛ふえの音ねで按摩あんまの容子ようすは分わかりませぬもの。」

「眞個まじたくだ。」

と寂さびしく笑わらつた、波々なみ／＼注ついだる茶碗ちやわんの酒さけを、屹きつと見みながら、

「杯おがすきの月つきを酌くまうよ、座頭ざとうどの殿どの。」と差俯さしうつむいて

獨言ひとりごとした。……が博多節はかたぶしの文句もんくか、知らず、陰々いん／＼として物寂ものさびしい、表おもての障子しやうじも裏透うらすくばかり、霜しもの月つきの影かげ冴さえて、辻つじに、町まちに、按摩あんまの笛ふえ、其その或あるも
のは波なみに響ひびく。

「や、按摩どのか。何んだ、唐突に驚かせ
る。．．．要らんよ、要りませぬ。」

と彌次郎兵衛。湊屋の奥座敷、此れが上段の間と
も見える、次に六疊の附いた中古の十疊。障子の背
後は直ぐに縁、欄干にずらりと硝子戸の外は、水煙
渺として、曇らぬ空に雲かと思える、長洲の端に星一
つ、水に近く晃らめいた、揖斐川の流れの裾は、潮
を籠めた霧白く、月にも苦を伏せ、蓑を乾す、繫船
の帆柱が森差と垣根に近い。其處に燭臺を、傍にし
て、火桶に手を懸け、怪訝な顔して、

「はて、お早いお着きお草臥れ様で、と茶を一ツ
持つて出て、年増の女中が、唯今引込んだばかりの
處。これから膳にもせう、酒にもせうと思ふ一寸の
隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？ ．．．

此の方、あの年増めを見送つて、入交つて来るは
若いのか、と前髪の正面でも見ようと思へば、霜げ
た冬瓜に草鞋を打着けた、と言ふ異體な面を、襖の
影から斜に出して、

(按摩でやす。) と又、悪く抜衣紋で、胸を折つて、横坐りに、蠟燭火へ紙火屋のかゝつた灯の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道の御館へ、目見得の雪女郎を連れて出た、化の慶庵と言ふ體だ。

要らぬと言へば、默然で、腰から前へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり．．．．怨敵退散。」

と苦笑ひして、．．．．床の正面に火桶を抱へた、法然天窓の、連の、其の爺様を見遣つて、

「捻平さん、お互に年は取りたくないてね。些と三舷でも、とあるべき處を、お膳の前に按摩が出来ますよ。．．．．見くびつたものではないか。」

「兎角、其の年效ひもなく、旅籠屋の式臺口から、何んと、事も慇懃に出迎へた、家の隠居らしい切髪の婆様をじろりと見て、

「ヤヤ、難有い、佛壇の中に夫婦が見えるわ、簀の子の天井から落ち度い。」 などゝ、膝栗毛の書拔きを遣らつしやるで魔が魅すのぢや。屋臺は古いわ、造りも廣大」。

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料られぬ。燈も暗いわ、
獺も出ようず。些と懲りさつしやるが可い。」

「さん候、これに懲りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして微笑みながら、兩手を懷に、胸を擴く、襖の上なる額を讀む。題して曰く、臨風榜可小樓。

「……とある、如何様な。」

「床に活けたは、白の小菊ぢや、一束にして掴み
ざし、喝采。」と讚める。

「いや、翁寂びた事を言ふわ。」

「それ／＼、唯今懲りると言うた口の下から、何
んぢや、其れは。やあ、見やれ、其許の袖口から、
茶色の手の、もそ／＼した奴が、ぶらりと出たわ、

揖斐川の獺の。」

「ほい、」

と視めて、

「南無三寶。」と、慌しく引込める。

「何んぢや其れは。」

「はゝゝはゝ、拙者うまれつき粗忽にいたして、よくものを落す處から、内の婆どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右糸で繫いだものさね。袖から胸へ潜らして、ずいと引張つて兩手へ嵌めるだ。何んと恐しからう。捻平さん、慥くまで身上を思うてくれる婆どのに對しても、無駄な祝儀は出せませんな。あゝ南無阿彌陀佛。」

「狸めが。」

と背を圓くして横を向く。

「それ、年増が来る。祕すべし、祕すべし。」
で、手袋をたくし込む。

處へ女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、漸と、今草鞋を解いたばかりだ。泊めて貰ふから、支度はしません。」と眞面目に言ふ。

色は淺黒いが容子の可い、其の年増の女中が、これには妙な顔をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「先づ酒から飲みます。」

「あの、めしあがりますものは？」

「姉さん、此處は約束通り、焼蛤が名物だの。」

七

「其のな、焼蛤は、今も町はつれの葦簀張なんぞ
でいたします。矢張り松毬で焼きませぬと美味うご
ざりませんで、當家では蒸したのを差上げます、味
淋入れて味美う蒸します。」

「はゝあ、榮螺の壺焼と言つた形、大道店で遣り
ますな。松並木を向うに見て、松毬のちよろ／＼火、
蛤の煙が此の月夜に立たうなら、丁と龍宮の田樂で、
乙姫様が洒落に姉さんかぶりを遊ばさうと云ふ處、
又一段の趣だらうが、故と其れがために忍んでも出

られまい。……當家の味淋蒸、其れが好からう。」

と小父者納得した顔して頷く。

「では、蛤でめしあがりますか。」

「何？」と、故とらしく耳を出す。

「あのな、蛤であがりますか。」

「いや、箸で食ひやせう、はゝはゝ。」

と獨で笑つて、懷中から膝栗毛の五編を一冊、ポ

ンと出して、

「難有い。」と額を叩く。

女中も思はず噴飯して、

「あれ、あなたは彌次郎兵衛様でございますな。」

「其の通り。……此の度の参宮には、都合

あつて五二館と云ふのへ泊つたが、内宮様へ参る途

中、古市の旅籠屋、藤屋の前を通つた時は、前度い

かい世話に成つた気で、薄暗いまで奥深いあの店頭

に、眞鍮の獅噛火鉢かぴか／＼とあるのを見て、略

儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辭儀をして

来た。が、町が狭いで、向う側の茶店の新姐に、此

の小兀を見せるのが辛かつたよ。」

と燈あかりに向けて、てらりと光ひからす。

「ほゝ、まゝ。」

「あはゝ。」

で捻平ねちべいも打笑うちわらふと、……此この機き會わいに誘さそはれたか、――先刻さつき二人ふたりが着ついた頃ころには、三味線みせん太鼓たいこで、トントン、チャカノ、ぢやぢやぢやんと沸返わきかへるばかりだつた。――丁度ちやうど八ツ橋形はしがたに歩行板あゆみいたが架かつて、土間どまを隔へたてた鄰となりの座敷ざしきに、凡およそ十四五人にんの同勢どうぜいで、女交をんなましりに騒さわいだのが、今いましがた按摩あんまが影かげを見みせた時じぶん分から、大河おほかはの汐しほに引ひかれたらしく、――一時ひとしきり人氣ひとけ勢はひが、遠とほくへ裾擴すそひろがりに茫ぼうと退のいて、寂しんとした。たゞだゞつ廣ひろい中なかを、猿さるが鳴なきながら走廻はしりまはるやうに、キヤノ、とする雛妓おしやくの甲走かんばしつた聲こゑが聞きこえて、重おもく、づつしりと、覆おつかぶさる風ふうに、何なにを話はなすともなく多た人數にんずの物音ものおとのして居ゐたのが、此この時とき、洞穴ほらあなから風かぜが抜ぬけたやうに哄どうと動搖どうよめく。

女中ぢよちゆうも笑わらひ引きに、すつと立たつ。

「いや、此方このほうは陰々いんくとして居ゐる。」

「其その方が無事はうぶじで可いいの。」

と捻平は火桶の上に脊くゞまつて、其處へ投出した
膝栗毛を差覗き、

「しかし思ひつきぢや、私は何うも此の寐つきが
悪いで、今夜は一つ枕許の行燈で読んで見ませう。」

「止しなさい、これを読むと胸が切つて、尚ほ目
が冴えて寝られなくなります。」

「何を言はつしやる、當事もない、膝栗毛を見て
泣くものがあらうかい。私が事を言はつしやる、其
許が餘程捻平ぢや。」

と言ふ處へ、以前の年増に、小女がついて出て、
膳と銚子を揃へて運んだ。

「蛤は直きに出来ます。」

「可、可。」

「何よりも酒の事。」

捻平も、猪口を急ぐ。

「さて汝にも一つ遣らう。爛の可い處を一杯遣ら

つし。」と、彌次郎兵衛、酒飲みの癖で、些とぶ

る／＼する手に一杯傾けた猪口を、膳の外へ、其の

膝栗毛の本の傍へ、疊の上に丁と置いて、

「姉さん、一つ酌いで遣つてくれ。」

と眞顔で言ふ。

小女が、きよとんとした顔を見ると、捻平に追つかける酌をして居た年増が見向いて、

「喜野、お酌ぎ・・・其の旦那はな、彌次郎兵衛様ぢやで、喜多八さんにお杯を上げなさんや。」と早や心得たものである。

八

小父者は何故か調子を沈めて、

「あゝ、能く言つた。俺を彌次郎兵衛は難有い。居心は可、酒は可。これで喜多八さへ一緒だつたら、膝栗毛を正のもので、太平の民となる處を、さて、

杯をさしたばかりで、恚う酌いだ酒へ、蠟燭の灯の
ちら／＼と映る處は、何うやら餓鬼に手向けたやう
だ。あの又馬鹿野郎は何うして居る——と膝
に手を支き、疊の杯を凝と見て、陰気な顔する。
捻平も、不圖、此の時横を向いて腕組した。

「旦那、其の喜多八さんを何んでお連れなさりま
せんね。」

と愛嬌造つて女中は笑ふ。彌次郎寂しく打笑み、
「むゝ、そりや何よ、其の本の本文にある通り、
伊勢の山田ではくれた奴さ。いゝ年をして娑婆氣な、
酒も飲めば巫山戯もするが、世の中は道中同然。暖
いにつけ、寒いにつけ、杖柱とも思ふ同伴の若いも
のに別れると、六十の迷兒に成つて、もし、此の邊
に棚からぶら下がつたやうな宿屋はござりませんか
と、賑かな町の中を獨りとぼ／＼と尋ね飽倦んで、
もう落膽しやした、と云つてな、どつかり知らぬ家
の店頭へ腰を落込んで、一服無心をした處……
彼處を讀むと串戯ではない。……捻平さん、
眞から以て涙が出ます。」

と言ふ、臉に映つて、蠟燭の火がちら／＼とする。

「姉や、心を切つたり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたゝいたが、

「ヤ、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越の隣室へ傾き、

「豪いぞ、金盃まで持ち出したわ、人間は皆裾が天井へ宙乗りして、疊を皿小鉢が踊るさうな。おゝゝ、三味線太鼓が鎗を刷つて打合ふ様子ぢや。」

「もし、お騒がしうござりませう、お氣の毒でござります。丁ど霜月でな、今年度の新兵さんが入營なさりますで、其の送別會ぢや言うて、彼方此方、皆、此の景氣でござります。でもな、お寝ります時分には時間に成るで静まりませう。何うぞ御辛抱なさいませう。」

「いやゝゝ、其れには及ばぬ、其れには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉つて、却つて賑かで大きに可い。悪く寂寞して、又唐突に按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな。」 と何か知らず、女中も讀

めめ顔かほして聞返きゝかへす。

捻平ねちべいこの話はなしを、打消うちけすやうに咳しわぶきして、

「さ、一献こんまゐ参らう。何どうぢや、此方こちらへも酌人しやくにんを些ちと頼たのんで、
の。・・・桑名くわなの殿様時雨とのさましぐれでお茶漬ちやづけ・・・

とか言いふ、土地とちの唄うたでも聞きかうではないかの。陽氣ようきにな、くわつと一つ。旅たびの恥はぢは搔棄かきすてぢや。主ぬしはソレ叱言こゝとのやうな勸進帳くわんじんぢやうでも遣やらつしやい。

染めそようにも髯ひげは無ないで、私わしはこれ、手拭てぬぐひでも疊たぐんで法然ほふねん天窓あたまへ載のせようでの。「と捻平ねちべいが坐すわりな

が腰こしを伸のして高たかく居直ゐなほる。と彌次郎やじらう眼まなこを二みつて、
「や、平家へいけ以來いらいの謀板むほん、其許そこの發議ほつぎは珍めづらしい、

二方にほう荒神鞍あらいかみなしで、眞中まんなかへ乗のりやせう。「
と夥おびたしく景氣けいきを直なほして、

「姉あねえ、何なんでも構かまはん、四五人にんきやり木遣ひいで來こい。
「と

と肩かたを張はつて大おほきに力りきむ。

立たてながら、女中酌にやうしやくの手てを差控さしひかへて、銚子ちやうしを、膝ひざに、と眞直まつすくに

「さあ、今彼方の座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、藝妓さんはあつたかな。」

小女が猪首で頷き、

「誰も居やはらぬ言うてゞやんした。」

「かいな、旦那さん、お気の毒さまでござります。狭い土地に、数のない藝妓やに依つて、恚うして會なんぞ立込みますと、目星い妓たちは、ちやつとの間に皆出拂ひます。然うか言うて、東京のお客様に、餘りな人も見せられはしませずな、容色が好いとか、藝がたぎつたとか言ふのでござりませぬとな

あ………」

「いや、恚うなつては、宿賃を拂はずに、此方人等夜遁をするまでも、三味を聞かなきや納まらない。眇、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」

「待ちなさりました。おほ、あの島屋の新妓さんなら屹と居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎぢや、廊下走つて、電話へ掛れや。」

「持つて来い、さあ、何んだ風車。」
 急に勢の可い聲を出した、餛飩屋に飲む博多節の兄哥は、霜の上の爛酒で、月あかりに直ぐ醒める、色の白いのも其まゝであつたか、二三杯、呷切の茶碗酒で、目の縁へ、颯と酔が出た。

「勝手にパイノ、吹いて居れ、でんノ、太鼓に笙の笛、此方あ小兒だ、なあ、阿媽。・・・いや、女房さん、其れにしても何かね、御當處は、此の桑名と云ふ所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の目は蠣や云ひます。名物は蛤ぢやもの、別に何も、多い譯はないけれど、こゝは新地なり、旅籠屋のある町やに因つて、つい、あの衆が、彼方此方から稼ぎに来るわな。」
 「然うだ、成程新地だつた。」と何故か一人で納得して、気の抜けたやうな片手を支く。

「お師匠さん、あんた、これから其の音聲を藝妓屋の門で聞かしてお見やす。眞個に、人死が出来ようも知れぬぜな。」と襟の處で、塗盆をくるりと廻す。

「飛んだ合せかゞみだね、人死が出来て堪るものか。第一、藝妓屋の前へは、うつかり立てねえ。」

「何故え。」

「悪くすると敵に出會す。」と投首する。

「あれ、藝が身を助けると言ふ、……お師匠さん、あんた、藝妓ゆえの、お身の上かえ。・

・・眞個にな、仇だすな。」

「違つた！ 藝者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけ／＼と、あんな憎いこと言ひなさんす。」と言ふ處へ、月は片明りの向う側。狭い町の、ものゝ氣勢にも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄の音が、土間に浸込むやうに響いて来る。・・・と直ぐ其の足許を潜るやうに、按摩の笛が寂しく聞える。

門附は屹と見た。

「噂をすれば、藝妓はんが通りまつせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……其のかはり、敵打たれうと思つてな。」

「あゝ、何時でも打たれて遣ら。ちよツ、可厭に煩く笛を吹くない。」

かたりと門の戸を外から開ける。

「えゝ、吃驚すら。」

「今晚は、―― 餛飩六ツ急いでな。」と草履穿きの半纏着、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立ち、

「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい聲音やな、何處の？」と聞く。

「こなひだ山田の新町から住替へた、こんの島家の新妓ぢや。」と言ひながら、鼻赤の若い衆は、覗いた顔を外に曲げる。

と門附は、脊後の壁へ胸を反らして、――一寸伸上

るやうにして、戸に立つ男の肩越しに、咬とした月の廓の、細い通を見透かした。

駒下駄は些と音低く、未だ、からころと響いたのである。

「澤山出なさるかな。」

「まあ、こんの餛飩のやうには行かぬで。」

「其の氣で、すぐに届けますえ。」

「はい頼んます。」と、男は返る。

亭主帳場から背後向きに、日和下駄を探つて下り、かたりびしりと手當り強く、其處へ廣蓋を出掛ける。はゝあ、夫婦二人の此の店、氣の毒千萬、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも氣を注げるぢや、可いか、可いか、可いか。一寸道寄りをして來るで、可いか、お方。」

と其處等じろ／＼と睨廻して、新地の月に提灯入らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがつと戸を開けた、後を閉めないで、ひよこ／＼出て行く。

釜の湯氣が颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から来て、

「何時まで、うつかり見送つてぢや、そんなに敵が打たれたいの。」

「女房さん、桑名ぢやあ．．．．．藝者の箱屋は按摩かい。」と悚然としたやうに肩を細く、此の時漸と居直つて、女房を見た、色が悪い。

十

「然うさ、如何に伊勢の濱荻だつて、按摩の箱屋と云ふのはなからう。私もなからうとは思ふが、今向う側を何とか屋の新妓とか云ふのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、一軒お

き二軒おきの、軒行燈では浅黄になり、月影では青
くなつて、薄い紫の座敷着で、褌を蹴出さず、ひつ
そりと、白い襟を俯向いて、足の運びも進まないや
うに何んとなく悄れて行く。……其の後から、
鼠色の影法師。女の影なら月に地を這ふ筈だに、寒
い道陸神が、のそ／＼と四五尺離れた處を、ずっと
前方まで附添つたんだ。腰附、肩附、歩行く振り、捏
つちて附着けたやうな不恰好な天窓の工合、何う
見ても按摩だね、盲人らしい、めんない千鳥
よ。……私あ何んだ、だから、按摩が箱屋を
すると云つちや可笑い、盲目に成つた箱屋かも知れ
ないぜ。」

「どんな風の、どれな。」
と門へ出さうにする。

「いや、最う見えない。呼ばれた家へ入つたらし
い。二人とも、ずっと前方で居なくなつた。然うか。
あ、盲目の箱屋は居ねえのか。ア又殖えた
ぜ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の
笛が降るやうだ。此の寒い月に積つたら、桑名の町
は針の山に成るだらう、堪らねえ。」

とぐいと呷つて、

「えゝ、ヤケに飲め、一杯何うだ、女房さん附合ひねえ。御亭主は留守だが、開放しよ、・・・・構ふものか。それ向う三軒の屋根越に、雪坊主のやうな山の影が覗いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがつた、来やあがつた、按摩々々、按摩。」

と呼吸も吐かず、続け様に急込んだ、自分の聲に、町の中に、ぬい、と立つて、杖を脚許へ斜交ひに突張りながら、目を白く仰向いて、月に小鼻を照らされた流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、其のまゝ凍附くやうに立留まつたのも、門附はよく分らぬ状で、

「影か、影か、阿媽、眞個の按摩か、影法師か。」
と激しく聞く。

「眞個なら、何うおしる。貴下、そんなに按摩さんが戀しいかな。」

「戀しいよ！ あゝ、」
と呼吸を吐いて、見直して、眉を顰めながら、聲

りさうに香を嗅ぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外を犬が走つても、按摩さんに見えたのさ。慙う、悪く言ふんぢやないぜ……其處へぬつくりと顯れたらう、酔つて居る、幻かと思つた。」

「眞個に待兼ねて居なさつたえ。あの、笛の音ばかり氣にしなさるので、私も何うやら解めなんだか、漸と分つたわな、何んともお待ち遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、御繁昌。」

「お客はお一人ぢや、ゆつくり療治してあげておくれ。其れなりにお寐つたら、お泊め申さう。」

と言ふ。

按摩どの、けろりとして、

「えゝ、其の氣で、念入りに一ツ、搦りませう

で。」と我が手を握つて、拉ぐやうに、ぐいと揉んだ。

「へい、旦那。」

「旦那ぢやねえ。ものもらひだ。」と又呷る。

女房が竊と睨んで、

「滅相な、あの、言ひなさる。」

「いや、横になる處がやない、澤山だ、此處で澤山だよ。……第一背中へ掴まれて、一呼吸でも應へられるか何うだか、實は其れさへ覺束ない。悪くすると、其のまゝ目を眩して打倒れようも知れんのさ。體よく按摩さんに掴み殺されると云つた形だ。」

と眞顔で言ふ。

「飛んだ事をおつしやりませ、田舎でも、これも、長年年期を入れました杉山流のものでござります。鳩尾に鉞をお打たせになりましたも、決して間違ひのあるやうなものではござりませぬ。」

と呆れたやうに、按摩の剥く目は蒼かりけり。

「うまい、まづいを言ふのぢやない。何時の幾日にも何時にも、洒落にもな、生れてから未だ一度も按摩さんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなにあんた、こがれなさつた癖に。」

「そりや、張つて／＼仕様がなから、目にちら

つくほど待ったがね、いざ．．．と成ると初産
です、灸の皮切も同じ事さ。何うにも勝手が分ら
ない。痛いんだか、痒いんだか、風説に因ると擦った
いとね。多分私も擦ったからうと思ふ。．．．
處が生憎、母親が操正しく、是でも密夫の兒ぢやな
いさうで、其の擦ったがりやう此の上なし。．．．
．．あれ、あんなあの、握飯を拵へるやうな手附を
される、と其の手で揉まれるかと思つたばかりで、
最う堪らなく擦りたい。何うも、あゝ、こりや不可
え。
と脇腹へ兩肱を、しつかりついて、搔窺窺むやう
に背筋を捻る。

「はゝゝはゝゝ、これは何うも。」と按摩は手持
不沙汰な風。

女房更めて顔を覗いて、

「何んと、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、可哀相だ、と言つてくんねえ。．．
．．然うかと言つて、恚う張つちや、身も皮も石
に成つて固りさうな、背が詰つて胸は裂ける。．．
．．揉んで貰はなくしては遣切れない。遣れ、構はな

い。
「

と激しい聲して、片膝を屹と立て、

「殺す気で蒐れ。此方は覺悟だ、さあ。ときに女

房さん、袖摺り合ふのも他生の縁ツさ。旅空掛けて

恚うしたお世話を受けるのも前の世の何かだらう、

何んだか、おなごりが惜いんです。搦殺されりや其

切だ、最一つ憚りだがついでおくれ、別れの杯に成

らうも知れん。」

と霏を切つて、ついと出すと、他愛なさも餘りな、

目の色の變りやう、眦も屹と成つたれば、女房は氣

を打たれ、黙然で唯目をニる。

「さあ按摩さん。」

「え、」

「女房さん酌いどくれよ！」

「はあ、」

と酌をする手が些と震へた。

此の茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛け

たのと一緒にあつた。

がた／＼と身震ひしたが、面は幸に紅潮して、

「あゝ、腸へ沁透る！」

「何か其の、何事が存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。

「先づ、」

と突張つた手をぐたりと緩めて、

「生命に別條は無さうだ、しかし、しかし應へる。」

とがつくり俯向いたのが、ふら／＼した。

「月は寒し、炎のやうな其の指が、火水と成つて骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉は燃える、血は冷える。あつ、」と言つて、両手を落した。

吃驚して按摩が手を引く、其の嘴や鯛に似たり。

兄哥は、確乎起直つて、

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あはれと思つて静に……よしんば徐と揉まれた處で、私は五體が碎ける思ひだ。」

其の思ひをするのが可厭さに、種々に惱んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれば引張る、逃げれば追ふ。形が無ければ聲がする……パイ／＼笛は

攻太鼓だ。恚う犇々と寄着かれちや、弱いものには
我慢が出来ない。淵に臨んで、岨の上に瞰下ろして
踏留まる膽玉のないものは、一層の思ひ、眞逆に飛
込みます。破れかぶれよ、按摩さん、従兄弟再従兄
弟か、伯父甥か、親類なら、さあ、敵を取れ。私は
ね、……お仲間の按摩を一人殺して居るん
だ。
「

十二

「今から丁ど三年前。……其の年は、此の
月から一月後の師走の末に、名古屋へ用があつて來
た。序と言つては悪いけれど、稼の繰廻しが何うに
か附いて、參宮が出来ると言ふのも、お伊勢様の思

召、冥加のほど難有い。ゆつくり古市に逗留して、
其れこそ次手に、．．．．浅熊山の雲も見よう、
鼓ヶ嶽の調も聞かう。二見ぢや初日を拜んで、堺橋
から、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡から志摩
へ入つて日和山を見物する。．．．．海が凪いだ
ら船を出して、伊良子ヶ崎の海鼠で飲まう、何でも
五日六日は逗留と云ふつもりで。．．．．山田で
は尾上町の藤屋へ滑つた。驚くべからず　ー　ま
さか其の時は私だつて、浴衣に袷ぢや居やしない。

着換へに紋付の一枚も持つた、縞で襲衣の若旦那
さ。．．．．ま、恚う、雲助が傾城買の昔を語
る。．．．．負惜みを言ふのぢやないよ。何も自分
の働きで然うした譯ぢやないのだから。　ー　聞
きねえ、親なり、叔父なり、師匠なり、恩人なりと
言ふ、．．．．私が稼業ぢや江戸で一番、日本中
の家元の大黒柱と云ふ、少元の苦い面した阿父があ
る。

いや、其の顔色に似合はない、氣さくに巫山戯た
江戸兒でね。行年其の時六十歳を、三つと刻んだは

をかしいが、數へ年のサバを算んで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何んとか言つて、禪の問答をするやうに、指を三本、ひよいと出してギロリと睨む……五十七歳とかけと云ふのさ。可いかね、其の氣だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父さんが大の禁句さ。……與一兵衛ぢやあるめえし、汝、定九郎のやうに呼ぶなえ、と唇を捻曲げて、叔父さんとも言はせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

此の叔父さんのお供だらう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は續く。何處へ行つても女はふらない、師走の山路に、嫁菜が盛りで、然も大輪が咲いて居た。

と此の桑名、四日市、龜山と、伊勢路へ掛つた汽車の中から、おなじ切符の誰彼が——其の催について名古屋へ行つた、私たちの、まあ……興行か……其の興行の風説をする。嘘にも何うやら、私の評判も可さうな。叔父は固より……何事も言ふには及ばん。——私りが口で饒舌つては、流儀の恥に成らうから、まあ、

何某なにがしと言いつたばかりで、世間せけんは承知しょうちすると思おもつて、聞ききねえ。

處ところかね、其その私わたしたちの事ことを言いふ次ついで手に、此この伊勢いせへ入はいつてから、屹きつと一緒にしよ出る、人ひとの名ながある。可いいかい、山田やまだの古市ふるいちに惣市そういちと云いふ按摩あんま鍼はりだ。」「

門附かどづけは其その名なを言いふ時とき、うつとりと瞳ひとみを据すゑた。

背せなかを抱いだくやうに背後うしろに立たつた按摩あんまにも、床几しやうぎに近ちかく裾すそを投なげて、向むかうに腰こしを掛かけた女房にようぼうにも、目めもくれず、擬なづと天井てんじやうを仰あふぎながら、胸前むなさきにかゝる湯氣ゆげを忘わすれたやうに手てで捌さばいて、

「按摩あんまだ、が其その按摩あんまが、舊もとは然さる大名だいみやうに仕つかへた士族しぞくの果はてで、聞ききねえ。私等わたしらが流儀りうぎと、同おなじ其その道みちの藝げいの上手じやうず。江戸えどの宗家そうけも、本山ほんざんも、當國たうごく古市ふるいちに於おいて、一人ひとりで兼かねたり、と言いふ勢いきほひで、自みづから宗山そうざんと名な告のる天狗てんぐ。高慢かうまんも高慢かうまんだが、また出で来る事ことも出で来る。・・・東京とうきやうの本場ほんばから、誰だれも來きて怯おびかされる。某それがしも參まゐつて拉ひかれた。あれで一眼がんでも有あらうなら、三重縣みへけんに居ある代物しろものではない。今度こんど名古屋なごやへ來きた連中れんぢゆうも然さうぢや、贗物にせものではなからうから、何なにも宗山そうざんに稽古けいこをして貰もらへとは言いはぬけれど、鰻うなぎの他ほかに、鯛たひ

がある、味を知つて歸れば可いに。――と才發
けた商人風のと、でつぶりした金の入齒の、土地の
物持とも思はれる奴の話したのが、風説の中でも耳
に付いた。

叔父はこく／＼坐睡をして居たつけ。私あ若氣だ、
襟巻で顔を隠して、睨むやうに二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、故と、叔父を一人で湯
へ遣り・・・女中にも一寸聞く・・・挨
拶に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云ふ、これ
／＼した藝人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ
事。思つたよりは高名で、現に、此の頃も藤屋に泊
つた、何其侯の御隠居の御召に因つて、上下で座敷
を勤た時、(さてもな、鼓ヶ嶽が近い所爲か、これ
ほどの松風は、東京でも聞けぬ、)と御賞美。

「的等にも聞かせたい。」と宗山が言はれます、
とちよろりと饒舌つた。私が黥間を――

(的等)

と言ふ。

的等の一人、恚く言ふ私だ・・・」

「尚ほ聞けば、古市のはづれに、其の惣市、小料理屋の店をして、妾の三人もある、大した勢だ、と言ふだらう。——何を！……按摩の分際で、宗家の、宗の字、斯の道の、本山が凄じい。恚う、按摩さん、舞臺の差は堪忍してくんな。」と、竊と痛さうに胸を壓へた。

「後で、能く気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、眞個の猪はないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、蕪の千枚漬も皇國無双で、早く言へば、此の桑名の、焼蛤も三都無類さ。」

其の気で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若氣の一圖に苛々して、第一其の宗山が氣に入らない。(的等。)もぐつと癩に障れば、妾三人で赫とした。

維新以來の世がはりに、……一時私等の稼業がすたれて、黥間が食ふに困つたと思へ。弓矢取

つては一萬石、大名株の藝人が、イヤ楊枝を削る、
かるめら焼を露店で賣る。・・・・・蕎麥屋の出前
持に成るのもあり、現在私が其小父者などは、田舎
の役場に小使ひをして、濁り酒のかすに酔つて、田
圃の畝に寝たもんです。・・・・・

其の妹だね、可いかい、私の阿母が、振袖の年頃
を、困る處へ附込んで、小金を溜めた按摩めが、些
とばかりの賃を枷に、妾にせう、と追ひ廻はす。

――危く駒下駄を踏返して、駕籠でなくつちや
見なかつた隅田川へ落ちようとしたつさ。

――其の話にでも嫌ひな按摩が。えゝ。

待て、見えない兩眼で、汝が身の程を明く見るや
う、療治を一つしてくれう。

で、翌日は謹んで、兩宮へ參拜した。

其の専さに、其の晩ばかりは些との酒で宵寝をし
た、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許へ水を置き、

「女中、其處等へ見物に、」
と言つた心は、穴を壓へて、宗山を退治る料簡。

と出た、風が荒い。荒いが此の風、五十鈴川で劃
られて、宇治橋の向うまでは吹くまいが、相の山の
長坂を下から哄と吹上げる。此が悪く生温
くつて、灯の前ぢや砂が黄色い。月は雲の底に淀り
して居る。神路山の樹は蒼くても、二見の波は白か
らう。酷い勢、ぱつと吹くので、たぢノと成る。
帽子が飛ぶから、其のまゝ、藤屋が店へ投返し
た。背筋へ孕んで、坊さんが忍ぶやうに
羽織の袖が翻々する。着替へるのも面倒で、晝間の
なりで、神詣での紋付さ。――袖畳みに懐中へ
捻込んで、何の洒落にか、手拭で頬被りをしたもん
です。

門附に成る前兆さ、状を見やがれ。と片手を
袖へ、二の腕深く突込んだ。片手で狙ふやうに茶碗
を壓へて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂然して居
る。軒が、がたぴしと鳴つて、軒行燈が
ばツノ、揺れる。三味線の音もしたけれど、吹さら
はれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶやうさ。何の事は
ない、今夜の此の寂しい新地へ、風を持って来て、

打着けたと思へば可い。

一軒、地の些と窪んだ處に、溝板から直ぐに竹の欄干に成つて、毛氈の端は刎上り、畳に赤い島が出て、洋燈は油煙に燻つたが、眞白に塗つた姉さんが一人居る、空気銃、吹矢の店へ、ひよろりとして引掛つたね。

取着きに、肱を置いて、怪しく正面に眼の光る、悟つた顔の達磨様と、女の顔とを、七分三分に狙ひながら、

「此の邊に宗山ツて按摩は居るかい。」と此處で實は様子を聞く氣さ。押懸けて行かうたつて些とも勝手が知れないから。

「先生様かね、いらつしやります。」と何と、(的等。)の一人に、先生を、然も、様づけに呼ぶだらう。

「實は、其の人の何を、一つ、聞きたくつて來たんだが、誰が行つても頼まれてくれるだらうか。」と尋ねると、大熨斗を書いた幕の影から、色の蒼い、鬢の亂れた、瘦せた中年増が顔を出して、

「知己ちかづきのない、旅たびの方かたには何どうか知しらぬ、お望のぞみなら、内うちから案内あんないして上あげませうか。」と言いふ。

茶代ちやだいを奮は發はずんで、頼たのむと言いつた。

「案内あんないして上あげなはれ、可いい旦那だんなや、気きを付つけ

て、「と目配めくばせをする、．．．と雑作ざふさはない、

其その塗ぬつたのか、いきなり、欄干らんかんを跨またいで出でる奴やつ

さ。

十四

「兩袖りうしゆで口くちを塞ふさいで、風かぜの中なかを俯向うつむいて行ゆ

く。．．．其その女をんなの案内あんないで、ついで向むかう路地ろぢを入はくと、何處どこも吹附ふきつけるから、戸とを鎖さしたが、怪あやしげ

な行燈の燻つて見える、ごた／＼した兩側の長屋の
中に、溝板の廣い、格子戸造りで、此の一軒だけ二
階屋。

軒に、御手輕御料理としたのが、宗山先生の住居
だった。

「お客様。」と云ふ女の送りで、づつと入る。

直ぐ其處の長火鉢を取巻いて、三人ばかり、變な女
が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頼杖やら、料理
の方は隙らしい。……上框の正面が、取着き
の狭い階子段です。

「座敷は二階かい、」と突然頬被を取つて上ら
うとすると、風立つので燈を置かない。眞暗だから
一寸待つて、と色めいてざわつき出す。と其の拍子
に風のなぐれで、奴等の上の釣洋燈がぱつと消えた。

其處へ、中仕切の障子が、次の室の燈にほのめい
て、二枚見えた。眞中へ、ぱつと映つたのが、大坊
主の額の出た、脣唇の大きい影法師。む、宗山め、
居るな、と思ふと、憎い事には……。影法師の、
其の背中に掴まつて、坊主を揉んでるのか華奢らし

い島田鬚で、此の影は、濃く映つた。

火燧々々、と女どもが云ふ内に、

「えへん、」と咳を太くして、大な手で、灰吹
を持ち上げたのが見えて、離れて煙管が映る。――
最う一倍、其の時圖體が擴がつたのは、袖を開いた
らしい。此奴、寢ん寢子の廣袖を着て居る。

漸と臺洋燈を點けて、

「お待遠でした、さあ、」
つて二階へ。吹矢の店から送つて来た女はと、中
段から一寸見ると、兩膝をづしりと、其處に居た奴
の背後へ火鉢を離れて、俯向いて坐つた。

「あの娘で可いのかな、他にもござりますよつ
て。」

と六疊の表座敷で低聲で言ふんだ。――は、
あ、商賣も大略分つた、と思ふと、其奴が、

「お誂は。」
と大な聲。

「あつさりしたもので一寸一口。其處で……」

「
實は……御主人の按摩さんの、咽喉が一つ
聞きたいのだ、と話した。」

「咽喉？」……と其奴がね、異に蔑んだ笑
ひ方をしたものです。」

「先生様の……でござりますか、早速然う
申しませう。」

で、地獄の手曳め、急に衣紋繕ひをして下りる。

少時して上つて来た年紀の少い十六七が、こりや何
うした、よく言ふ口だが芥溜に水仙です、鶴です。

帯も襟も唐縮緬ぢやあるが、もみぢのやうに美しい。

結綿のふつくりしたのに、淺黄鹿の子の絞高な手柄
を掛けた。やあ、三人あると云ふ、妾の一人か。おゝ

ん神の、お膝許で沙汰の限りな！ 宗山坊主の脊中

を揉んでた島田鬚の影らしい。惜しや、五十鈴川の
星と澄んだ其の目許も、鯨の鰭で濁らう、と可哀に

思ふ。此の娘が紫の袷紗に載せて、薄茶を持つて來
たんです。

いや、御本山の御見識、其の咽喉を聞きに來たと

成ると・・・客に先づ袴を穿かせる仕向をする
な、眞劍勝負面白い。で、此方も勢、懷中から羽織
を出して着直したんだね。

やがて、又持出した、杯と云ふのか、朱塗に二見
ヶ浦を金蒔繪した、杯臺に構へたのは凄からう。

「先づ一ツ上つて、此方へ。」
と按摩の方から、此の杯の指圖をする。其の工合
が、謹んで聞け、と云つた、頗る權高なものさ。

どかりと其處へ構へ込んだ。其の容子が膝も腹も
づんぐりして、胴中ほど咽喉が太い。耳の傍から眉
間へ掛けて、小蛇のやうに筋が舐くる。眉が薄く、
鼻がひしゃげて、ソレ其の唇の厚い事、お刺に頬骨
がギシと出て、齒を噛むとガチノ、鳴りさう。左の
一眼べとりと盲る、右が白眼で、ぐるりと翻つた、
然も一面、念人の黒痘瘡だ。

が、争はれないのは、不具者の相格、肩つきばか
りは、みじめらしく悄乎して、猪の熊入道もがつく
り投首の抜衣紋で居たんだよ。」

「否な、何も私が意地悪を言ふわけではないゑ」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして――傍に

柔かな髪の毛の房りした島田の鬢を重さうに差俯向

く・・・・・襟足白く冷たさうに、水紅色の羽二重

の、無地の長襦袢の肩が、辻つて、寒げに脊筋の抜

けるまで、嫺やかに、打消れた、残んの嫁菜花の薄

紫、淺葱のやうに目に淡い、藤色縮緬の二枚着で、

姿の寂しい、二十ばかりの若い藝者を流盼に掛け

つゝ、

「此のお座敷は貰うて上げるから、なあ和女、最
うちやつと内へお去にや。・・・・島家の、あの

三重さんやな、和女、お三重さん、お歸り！」

と屹と言ふ。

「お前さんがいでやで、ようお客さんの御機嫌を

取つてくれるであらうと、小女ばかり附けて置いて、

私が勝手へ立違うて居る中や、・・・・勿體ない、

お客たちの、お年寄なか気に入らぬか、近頃山田か

ら來た言うて、此方の私の許を見くびつたか、酌を

せい、と仰有つても、浮々とした顔はせず……
三味線聞かうとおつしやれば、鼻の頭で笑うたげな。
傍に居た喜野が見兼て、私の袖を引きに来た。

先刻から、あゝ、恚うと、口の酸くなるまで、機嫌を取るやうにして、私が和女の調子を取つて、よしこの一つ上方唄でも、何うぞ三味線の音をさしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蠟燭の灯も白けると、頼むやうにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うで、知らぬ云うて、曲なりにもお座つき一つ弾けぬ藝妓が何處にある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、其でないか。貴客がたのお人柄を見りや分るに、何で和女、勤める気や。私が濟まぬ。さ、お立ち。えゝ、私が箱を下げて遣るから。」

と優しいのがツンと立つて、襖際に横にした三味線を邪険に取つて、衝と縦様に引立てる。

「あゝれ、」

はつと裳を摺らして、取組るやうに、女中の膝を

竊と抱き、袖を引き、三味線を引留めた。お三重の姿は崩るゝ如く、芍薬の花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、勘忍して、勘忍して、」
と、呼吸の切れる聲が濕んで、

「お客様にも、此のお内へも、な、何で私が失禮
しませう。眞個に、あの、眞個に三味線は出来ませ
んもの、姉さん、」

と言が途絶えた。．．．．

「今しかたも、な、他家のお座敷、隅の方に坐つ
て居ました。不斷ではない、兵隊さんの送別會、大
陽気に騒ぐのに、藝のないものは置かん、衣服を脱
いで踊るんなら可、可厭なら下げると．．．．私
一人歸されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷い
めに逢ひました、え。」

三味線も弾けず、踊りも出来ね、座敷で衣物が脱
げないなら、内で脱げ、引剥ぐと、な、帯も何も
取られた上、臺所で突伏せられて、引窓を故と開け
た、寒いお月様のさす影で、恥かしいなあ、柄杓で
水を立續けて乳へも胸へもかけられましたの。

此方から、あの、お座敷を掛けて下さいますと、
何うでせう、炬燵で温めた襦袢を着せて、東京のお
客ぢやさうなと、な、取つて置きに着物を出して、
能う勤めて歸れや言うて、御主人が手で、駒下駄ま
で出すんです。

勤めるたつて、何うしませう・・・踊は立つ
て歩行くことも出来ませんし、三味線は、其が姉さ
ん、手を當てれば誰にだつて、音のせぬ事はないけ
れど、弾いて聞かせとおつしやるもの、どうして私
唄へます。

不具でもないに情ない。調子が自分で出来ません。
何を何うして、お座敷へ置いて頂けようと思ひます
と、気が怯けて気が怯けて、口も満足利けませんか
ら、何が氣に入らないで、失禮な顔をする、と思
ひ遊ばすのも無理はない、なあ。・・・

此のお家へは、お臺所で、洗ひ物のお手傳をいた
します。姉さん、え、姉さん。―

と袖を擦つて、一生懸命、うるんだ目許を見得も
なく、仰向けに成つて女中の顔。・・・色が見
る見る柔いで、突いて立つた三味線の棹も撓みさう

に成つた、と見ると、二人の客へ、向直つた、ふつくり主ある綾の帯の結目で、尚ほ其の女中の袂を壓へて。・・・

十六

お三重は、而して、更めて二箇の老人に手を支いた。

「藝者でお呼び遊ばした、と思ひますと・・・お役に立たず、極りが悪うございまして、お銚子を

持ちますにも手が震へてなりません。下婢をお傍へお置き遊ばしたとお思ひなさいまして、お休みになりますまでお使ひなすつて下さいまし。お背中を敲きませう、な、何うぞな、お肩を揉まして下さいまし。其なら一生懸命に屹と精を出します。」

と惜氣もなく、前髪を疊につくまで平伏した。三指づきの折かゞみが、こんな中でも、打上る。

本を開いて、道中の繪をじろ／＼と黙つて見て居た捻平が、重くるしい口を開けて、

「子孫末代よい意見ぢや、旅で藝者を呼ぶなぞは、なう、お互に以後謹まう……」

と火箸に手を置く。

所在なさうに半眼で、正面に臨風榜可小樓を仰ぎながら、程を忘れた巻蓑、此時、口許へ火を吸つて、慌てゝ灰へ抛つて、彌次郎兵衛は一つ咽せた。

「えゝ、いや、女中、……迫つて祝儀はする。此處でと思ふが、其の娘が氣が詰らうから、何處か小座敷へ休まして皆で餛飩でも食べてくれ。私が驕る。で。何か面白い話をして遊ばして、臆て可い時分に歸すが可い。」と冷くなつた猪口を取つ

て、寂しさうに衝と飲んだ。

女中は、これよりさき、支いて突立った其の三味線を、次の室の暗い方へ密と押遣つて、がつくりと筋が萎えた風に、折重なるまで摺寄りながら、黙然りで、燈の影に水の如く打揺ぐ、お三重の背中を擦つて居た。

「島屋の亭が、そんな酷い事をしをるかえ。可いわ、内の御隠居に然う言うて、沙汰をして上げよう。心安う思うておいで、眞個にまあ、能う和女、顔へ疵もつけんの。」

と、かよわい腕を撫下ろす。

「あゝ、其も賣物ぢや言ふだけの斟酌に違ひないな。……お客様に禮言ひや。さ、而して、何かを話しがてら、御隠居の炬燵へおいで。切下髪に頭巾被つて、丁度な、羊羹切つて、茶を食べてや。

けども、

とお三重の、其の清らかな襟許から、優しい鬢毛を差覗くやうに、右瞻左擔て、

「和女、因果やな、眞個に、三味線は弾けぬかいペンともシャンとも。」

で、故と慰めるやうに吻々と笑つた。

人の情に溶けたと見える・・・氷る涙の玉を散らして、はつと泣いた聲の下で、

「はい、願掛けをしましても、鹽断ちまでしましたけれど、何うしても分りません、調子が一つ出来ません。性來でござんせう。」

師走の闇夜に白梅の、面を蠟に照らされる。

「踊もかい。」

「は・・・い、」

「泣くな、弱蟲、さあ一つ飲まんか！ 元氣をつ

けて。向後何處へか呼ばれた時は、怯えるなよ。氣

の持ちやうで何うにも成る。ジャカ／＼と引鳴らせ、

絲瓜の皮で搔廻すだ。琴も胡弓も用はない。銅鑼鑊

を叩けさ。簫の笛をパイと遣れ、上手下手は誰に

も分らぬ。其なら藝なしとは言はれまい。踊が出来

ずば體操だ。一、

と左右へ、羽織の紐の断れるばかり大手を擴げ、

寛濶な胸を反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鐵砲二つ、ぬいと前へ

突出つきたいて、励はげます如ごとく呵から々と彌や次じ郎る兵衛べゑ。

「これ、其その位くらゐな事ことは出で来きよう。いや、其それも度ど胸きょうだな。見みた處ところ、其そのやうに氣きが弱よわくては、如いか何な事ことも遣やつけられまい、可か哀はい相さうに。」

と聲こゑが掠かすれる。

「あの・・・私が、自分じぶんから、言いひます事ことは出で来きません、お恥はづかしいのでございませうが、舞まの眞ま似ねが少すこしばかり立たてますの、其それも唯ただ一いっツだけ。」

と云いふ顔かほを俯うつむけて、恥はづかしさうに又また手てを支つく。

「舞まへるかえ、舞まへるのかえ。」

と女おんな中ぢゆうは嬉うれしさうな聲こゑをして、

「おほ、踊をどりや言いうで明あかんのぢや。舞まへるのなら立たつておくれ。此このお座ざ敷しき、遠ゑん慮りよは入いらん。待まちなはれ、地ぢが要いらう。これ喜き野の、彼あそこ處この廣ひろ間まへ行いつてな、内うちの干せんが然さう言いうたて、誰だれでも弾ひけるのを借かりて來きやよ。」

とぼんとして居ゐた小こ女をんなの喜き野のが立たたうとする、と、名な告のつたお干せんが、打うち傾かたむいて、優やさしく口くち許もとを一ち寸い曲まげて傾かたむいて、

「待まつて、待まつて、」

十七

平時と違ふ。．．．．一度榮處へ行きなざると、日曜でなうては出られぬ、．．．．お國の爲やで、馴れぬ苦勞もしなさんす。新兵さんの送別會や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。

可いわ、旅の恥は掻棄てを反對なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を掻廻さう。お三重さん、立つのは何？ 有るものか、無いものか言ふも行過ぎた．．．．有るものとして無いけれど、何うに間に合はせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立たうとした、お千の膝を、袖で壓へて、些とはなじろんだ、お三重の愛橋。

「絲に合ふなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の眞似なんです。」と、言ひも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父者と捻平に背向に成つた初々しさ。包ましやかな姿ながら、身を揉む姿の着崩れして、袖を離れて疊に長い、襦袢の袖は媚かし

い。

「何、其の舞を舞ふのかい。」 と彌次郎兵衛は

一言云ふ。

捻平膝の本をばつたり伏せて、

「さて、飲まう。手酌でよし。此處で舞なぞは願ひ下げぢや。せめてお題目の太鼓にさつしやい。ふあはゝゝゝ、」 と何故か皺枯れた高笑ひ、此の時はばかり天井に哄と響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おゝ。」

と不性に漸と應へる。

「何も道中の話の種ぢや、一寸見物をしようと思ふね。」

「先づ、ご免ぢや。」

「然らば、其許は目を瞑るだ。」

「えゝ、縁起の悪い事を言はさる。．．．明日にも江戸へ歸つて、可愛い孫娘が顔を見るまでは、死んでもなかな／＼目は瞑らぬ。」

「さて／＼捻るわ、ゾレ其處が捻平さね。勝手に

なされ。さあ、あの娘立つたり、此の爺様に遠慮は
入らぬぞ。それ、何にも藝がないと云うて肩腰さす
らうと卑下をする。どんな眞似でも一つ遣れば、立
派な藝者の面目が立つ。祝儀取るにも心持が可から
うから、是非見たい。が、しかし心のまゝにしなよ、
決して勤を強ひるぢやないぞ。」

「あんなに仰有つて下さるもの。さあ、どんな事
するのや知らんが、まづうても大事な、大事な、
それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

と僅かに身を起すと、紫の襟を噛むやうに――
ふつくりしたのが、あはれに竄れた――

頤深く、恥かしさうに、内懷を覗いたが、膚身に
着けたと思はるゝ、……胸やゝ白き衣紋を透
かして、濃い紫の細い包、袱紗の縮緬が翻然と翻る
と、燭臺に照つて、颯と輝く、銀の地の、あゝ、白
魚の指に重さうな、一本の舞扇。

晃然とあるのを押頂くやう、前髪を掛けて、扇を
其の、玉簪の如く額に當てたを、其のまゝ折目高に
きり／＼と、月の出汐の波の影、靜に照々と開くとゝ

もに、顔を隠して、反らした指のみ、兩方親骨にち
らりと白い。

又川口の汐加減、隣の廣間の人動揺めきが颯と退
く。

唯見れば皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、
紺青の月、唯一輪を描いたる、扇の影に聲澄みて、

「――其時あま人申様、もし此たまを取得た
らば、此御子を世繼の御位になし給へと申しかば、
子細あらじと領承し給ふ、扨て我子ゆゑに捨ん命、
露ほども惜からじと、千尋のなはを腰につけ、もし
此玉をとり得たらば、此なはを動かすべし、其時人々、
ちからをそへ――」

と調子が緊つて、
「……ひきあげ給へと約束し、一の利劍を
抜持つて、」

と扇をきりゝと袖を直す、と手繰ぞ見ゆる、自か
ら、衣紋の位に年長けて、瞳を定めた其の顔。硝子
戸越に月さして、霜の川浪照添ふ。膝立据ゑた疊
にも、燭臺の花颯と流るゝ。

「あゝ、待てい。」
と捻平、力の籠つた聲を掛けた。

十八

で、火鉢をぶくと傍へ引いて、
「女中、も些とこれへ火をおくれ。いや、立つに
及ばん。其の、鐵瓶をはずせば可し。」と捻平が
いひつける。
此の場合なり、何となく、お千も起居に身體が緊
つた。

靜に炭火を移させながら、捻平は膝をずらすと、

革靴などは次の室へ……其だけ床の間に差置いた……車の上でも頸に掛けた風呂敷包を、重いものゝやうに両手で柔かに取つて、膝の上へ据ゑながら、お千の顔を除けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつゝ、

「あゝ、これ、お三重さんとか言ふの、其のお娘、手を上げられない。さ、手を上げて、」

と言ふ。……お三重は利剣で立たうとしたのを、慌しく捻平に留められたので、此の時まで、差開いた其の舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向いた顔をひたと額につけて、片手を疊に支いて居た。倅う捻平に聲懸けられて、わづかに顔を振上げながら、きり／＼と一先づ閉ぢると、其の扇を疊むに連れて、今まで、潤と瞳を張つて見据ゑて居た眼を、次第に塞いだ彌次郎兵衛は、ものも言はず、火鉢のふちに、ぶる／＼と震ふ指を、と支えた態の、巻蓑から、音もしないで、ほろ／＼と灰がこぼれる。

捻平座蒲團を一膝出て、

「いや、更めて、熟と、見せて貰はうぢやが、先づ此方へ寄らしやれ。えゝ、今の謠の、氣組みと、

其の形。教へも教へた、さて、習ひも習うたの。

恚うまで此を教ふるものは、四國の果にも他にはあるまい。あらかた人は分つたが、其となく音信も聞きたい。の、其許も黙つて聞かつしやい。」

と彌次が方に、捻平目遣ひを一つして、

「先づ、何うして、誰から、御身は習うたの。」

「はい、」

と弱々と返事した。お三重は最う、他愛なく娘に成つて、ほろりとして、

「あの、前刻も申しましたやうに、不器用も通越した、調子はづれ、其の上覚えが悪うござんして、

長唄の宵や待ちの三味線のテンもツンも分りません。

此の間まで居りました、山田の新町の姉さんが、朝

と晝と、手隙な時は晩方も、日に三度づゝも、あの

噛んで含めて、胸を割つて刻込むやうに教へて下す

つたんでございますけれど、自分でも悲しい。・

・・・暁の、ただけ十日かゝつて、漸と眞似だけ弾

けますと、夢に成つて最う手が違ひ、心では思ひな

がら、三の手が一へ滑つて、とぼけたやうな音がし

ます。

巖の裂目へ俯向けに口をつけさして、（こいし、こいし。）と呼ばせませす。若い衆は舳に待つて、聲が切れると、榮螺の殻をびし／＼と打着けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。．．．私其は、師走から、寒の内、八百八島あると言ふ、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巖の角は針のやうな、あの、其の上で、（こいし、こいし。）つて、唇の、しびれるばかり泣いて居る。咽喉は裂け、舌は凍つて、潮を浴びた裙から冷え通つて、正體がなくなる處を、貝殻で引搔かれて、漸と船で正氣が付くのは、灯もない、何の船やら、あの、まあ、鬼の支いた棒見るやうな帆柱の下から、皮の硬い大な手が出て、引掴んで抱込みます。

空には蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。暗の夜の血の池に落ちたやうで、あゝ、生きて居るか．．．千鳥も鳴く、私も泣く。．．．お恥かしうござんす。」

と翳す扇の利劍に添へて、水のやうな袖をあて、顔を隠した其の風情。人は聲なくして、たゞ、ちり／＼と、蠟燭の涙白く散る。

此の物語を聞く人々、如何に日和山の頂より、志摩の島々、海の風、霞の池に鶴の舞ふ、あの、麗朗なる景色を見たるか。

十九

「泣いてばかり居ますから、氣の荒いお船頭が、こんな泣蟲を買ふほどなら、伊良子崎の海鼠を蒲團で、彌島の烏賊を遊ぶつて、何の船からも投出される。」

又、あの巖に追上げられて、潮風の間々に、こいし、こいし。と泣くのでござんす。

手足は凍つて貝になつても、（こいし）と泣く
のが本望な。巖の裂目を沖へ通つて、海の果まで響
いて欲しい。もう船も去ね、潮も来い。……
其のまゝで石に成つてしまひたいと思ふほど、お客
様、私は、あの、
と亂れた襦袢の袖を銜た、水紅色映る臉のあたり、
ほんのりと薄くして、
「心でばかり長い事、思つて居ります人があつ
て。……藝も容色もないものが、生意氣を云
ふやうですが、……たとひ殺されても、死ん
でもと、心願掛けて居りました。

一晩も、矢張蒼い灯の船に買はれて、其の船頭衆
の言ふ事を肯かなかつたので、此方の船へ突返され
ると、艫の處に行火を跨いで、どぶろくを飲んで居
た、私を送りの若い衆がな、玉代だけ損をしゃはれ、
此方衆の見る前で、此の女を、海士にして慰まうと、
月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、膚の紐へなはを付けて、
倒に海の深みへ沈めます。づん／＼づんと沈んでな、

最う奈落かと思ふ時、釣瓶のやうにきり／＼と、身體を車に引上げて、髪の手も切らせずに、又海へ突込みました。

此の時な、其の繋り船に、長崎邊の伯父が一人乗込んで居ると云うて、お小遣の無心に來て、泊込んで居りました、二見から鳥羽がよひの馬車に、馭者をします、寒中、襦袢一枚に袴服を穿いた若い人が、私のそんなにされるのが、餘り可哀相な、と然う云うて、伊勢へ歸つて、其の話をしましたので、今、あの申しました。・・・

此の間まで居りました、古市の新地の姉さんが、随分なお金子を出して、私を連れ出してくれましたの。

其でな、鳥羽の鬼へも面當に、藝をよく覚えて、立派な藝子に成れやつて、姉さんが、然うやつて、目に涙を一杯ためて、ぴし／＼撥で打ちながら、三味線を教へてくれるんですが、何うした因果か、些とも覚えられません。

人さしと、中指と、一寸の間を、一日に三度づつ、一週間も鳴らしますから、近所鄰も迷惑して、御飯もまづいと言ふのですえ。

又月の良い晩でした。あゝ、今の御主人が、深切な
だけ尚ほ辛い。……何の、身體の切ない苦し
いだけは、生命が絶えれば其で済む。一層また鳥羽
へ行つて、あの巖に掴まつて、（こいし、こいし、）
と泣かうか知らぬ、膚の紐になはつけて、海へ入
れられるが氣安いやうな、と島も海も目に見えて、
ふら／＼と月の中を千鳥が、冥土の使ひに来て、連
れて行かれさうに思ひました。……格子前へ
流しが來ました。

新町の月影に、露の垂りさうな、あの、ちら／＼
光る撥音で、

……博多帶しめ、筑前絞り——
と、何とも言へぬ好い聲で。

「へい、不調法、お喧しう、」つて、其のまゝ
行きさうにしたのです。

「あゝ、身震かするほど上手い、あやかるやうに
拜んで來な、それ、お賽錢をあげる氣で。」

と瀧縞お召の半纏着て、灰に袖のつくほどに、し
んみり聞いてやつた姉さんが、長火鉢の抽斗からお
寶を出して、キイト、あの繻子が鳴る、帯へ挿んだ

懐紙くわいしに捻ひねつて、私わたしに持もたせなすつたのを、盆ぼんに乗のせて、戸とを開あけると、もう一い間げん行きなさいます。二人ふたりの間あひだにある月つきをな、影かげで繫つないで、ちやつと行いつて、「是こいし喃し。」と呼よんで、出だした盆ぼんを、振ふり向むいてお取とりでした。私わたしや、思おもはず其その手てに鎚すがつて、涙なみだがひとりでに出でましたえ。男おとこで居ゐながら、こんなにも上手うずな方かたがあるものを、切せめて其その指ゆび一本ほんでも、私わたしの身からだについたらばと、つい、おろ／＼と泣ないたので

す。
頬ほ被かむりをして居ゐなすつた。あの其その、私わたしの手てを取とつたまゝ、黙だまつて、少すこし脇わきの方ほうへ退のいた處ところで、「何なにを泣なく、「つて優やさしい聲こゑで、其その門かど附つけが聞きいてくれます。もう恥はぢも何なにも忘わすれてな、其その、あの、何どうしても三さ味み線せんの覺おぼえられぬ事ことを話はなしました。」

「よく聞いて、暫時熟と顔を見て居なさいました。」「藝事の出来るやうに、神へ願懸をすると云つて、夜の明けぬ内、外へ出る。鼓ヶ嶽の裾にある、雑樹林の中へ来い。三日とも思ふけれど、主人には、七日と頼んで。すぐ、今夜の明方から。……。分つたか。若い女の途中が危い、此の入口まで来て待つて遣る、化されると思ふな、夢ではない。・・・」

とお言ひになり、三味線を胸に附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒塀を去きなさいます。其の事は言はぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離取つて、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ氣でな、――大恩のある御主人の、此の格子戸も見納めか、と思ふやうで、軒下へ出て振り返つて、門を視めて、立つて居るとな。

「おいで、」
と云つて、突然、背後から手を取りなすつた、門

附の其のお方。

私はな、よう覺悟はして居たが、天狗様に攫はれるかと思ひましたえ。

あとは夢やら現やら。明方内へ歸つてからも、其の後は二日も三日も唯茫として居りましたの。・・・鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流の音と聞えます、雑木の森の暗い中で、其の方に教はりました。・・・舞も、あの、さす手も、ひく手も、唯背後から背中を抱いて下さいますと、私の身體が、舞ひました。其れだけより存じません。

尤も、私が、あの、鳥羽の海へ投入られた、其の身の上も話しました。其の方は不思議な事で、私とは敵のやうな中だ事も、種々入組んでは居りますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言ふな、と口留めをされました。何んにも話がりません。

五日目に、最う可いから、此を舞つて座敷をせい。藝なし、とは言ふまい、ツて、お記念なり、しるしなりに、此の舞扇を下さいました。」

と袖で胸へ緊乎と抱いて、ぶる／＼と肩を震はし

た、後毛がはらりと成る。

捻平溜息をして頷き、

「いや、能く分つた。教へ方も、習ひ方も、話さ
れずと能く分つた。時に、山田に居て、何うぢやな、
其の舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謠ひました時は、皆が、わつと
笑ふやら、中には恐い怖いと云ふ人もござんす。何
故言ふと、五日ばかり、あの私かな、天狗様に誘ひ
出された、と風説したのでござんすから。」

「は、如何にも師匠が魔でなくては、其の立方は
習はれぬわ。むゝ、で、何かの、伊勢にも謠うたふ
ものゝ、五人七人はあらうと思ふが、其の連中には
見せなんだか。」

「えゝ、物好に試すつて、呼んだ方もありました
が、地をお謠ひなさる方が、何ぢやゝら、些とも、
ものに成らぬと言つて、すぐにお留めなさいました
の。」

「はゝあ、いや、其の足拍子を入れられては、や
はな謠は断れて飛ぶぢやよ。はゝゝはゝゝ、唸る連中
粉灰ぢやて。かたゝゝ此の桑名へ、住替へとやら
したのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠えて飛ぶ處は、梟の憑
物がしよつた、と皆氣違にしなさいます。姉さんも、
手放すのは可哀相や言つて下さいましたけれ
ど、・・・・周圀の人が承知しませず、・・・・
此の桑名の島屋とは、行かひはせぬ遠い中でも、姉
さんの縁續きでござんすから、預けるつもりで寄越
されましたの。」

「おほ、其處で、又辛い思をさせられるか。先づ
／＼、其は後でゆつくり聞かう。・・・・其のお
娘、私も同一ぢや。天魔でなくて、若い女が、術を
するはと、仰天したので、手を留めて濟まなんだ。
さあ、立直して舞うて下さい。大儀ぢやらうが、一さ
し頼む。私も久ぶりでも可懐しい、御身の姿で、若師
匠の御意を得よう。」

と言の中に、膝で解く、其の風呂敷の中を見よ。

土佐の名手が畫いたやうな、紅い調は立田川、月の裏皮、表皮。玉の砧を、打つや、うつゝに、天人も聞けかしとて、雲井、と銘ある祕藏の塗胴。老の手捌き美しく、錦に梭を、投ぐるやう、さら／＼と緒を緊めて、火鉢の火に高く翳す、と・・・呼吸をのんで驚いたやうに見て居たお千は、思はず、はつと両手を支いた。

藝の威厳は争はれず、此の捻平を誰とかする、七十八歳の翁、邊見秀之進。近頃孫に代を譲つて、雪叟とて隠居した、小鼓取つて、本朝無雙の名人である。

いざや、小父者は能役者、當流第一の老手、恩地源三郎、即是。

此の二人は、侯爵津の守が、參宮の、假の館に催された、一調の番組を勤め濟まして、あとを膝栗毛で歸る途中であつた。

却説、餛飩屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、其から、種々勿體つける所作があつて、やがて大坊主が謠出した。

聞くと、何うして、思つたより出来て居る、按摩の藝ではない。……戸外をどツどと吹く風の中へ、此の聲を打撒けたら、あのパイノ、笛ぐらゐに纏まらうと云ふもんです。成程、随分夥間には、此奴に（的等。）扱ひにされようと言ふのが少くない。

が、私に取つちや小敵だつた。けれども藝は大事です、侮るまい、と氣を緊めて、其處で、膝を。」
と坐直ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋が緊る。

「……此の膝を丁ど叩いて、黙つてニツ三ツ拍子を取ると、此の拍子が尋常んぢやない。……親なり師匠の叔父きの膝に、小兒の時から、抱かれて習つた相傳だ。對手の節の隙間を切つて、伸縮みを緊めつ、緩めつ、聲の重味を芻上げて、咽

喉の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍子の分らない、満更の素人は、盲目聾で氣にはしないが、些と商賣人の端くれで、聊か心得のある對手だと、トンと一つ打たれたゞけで、最う聲が引掛つて、節が不状に蹴躓く。三味線の間も同一だ。何うです、意氣なお方に釣合はぬ……ン、と一ツ刎ねないと、野暮な矢の字が、とうふにかすがひ、糠に釘でぐしやりと成らあね。

さすがに心得のある奴だけ、商賣人にびたりと一ツ、拍子で聲を押伏せられると、張つた調子が直ぐにたるんだ。思へば餘計な若氣の過失、此方は畜生の淺猿しさだが、對手は素人の悲しさだ。

あはれや宗山。見る内に、額にたら／＼と衝と汗を流し、死聲を振絞ると、頭から胸へ膏を絞つた……あの其の大きな唇が海鼠を干したやうに乾いて来て、舌が硬つて呼吸が發奮む。わな／＼と震へる手で、疊を掴むやうに、うたひながら猪口を拾はうとする處、ものゝ本を未だ一枚とうたはぬ前、ピシリと其處へ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はつと火のやうな呼吸を吐く、トタンに眞俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、大のやうに疊を嘗めた。

「先生、御病氣か。」つて私あ莞爾したんだ。

「是非聞きたい、平に何うか。宗山、此の上には成つても、貴下のを一番、聞かすには死なれぬ。」と拳を握つて、せい／＼言つ居つてる。

「按摩さん。」

と私は呼んで、

「尾上町の藤屋まで、何のくらゐ離れて居る。」

「何んで、」

と聞く。

「間に依つては聲が響く。内證で来たんだ。・・・藤屋には私の聲が聞かしたくない、叔父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の氣勢を知るとき——唯さへ目敏い老人が、此の風だから寝苦しがつて、フト起きてゞも居るとならない、祝儀は置いた。歸るぜ。」

ト宗山が、擬と塞いだ目を、ぐる／＼と動かして、

「暫く、今の拍子を打ちなされ．．．．古市から尾上町まで聲が聞えようか、と言ひなされる、御大言、年のお少さ。まだ一度も聲は聞かず、顔は固より見た事もなければ．．．．當流の大師匠、思地源三郎どの養子と聞く．．．．同じ喜多八氏の外にはあるまい。然やうでござらう、思地、」
と私の名を丁と言ふ。

あゝ、酔つた、

と杯をばたりと落した。

「饒舌つて悪い私の名ぢやない。叔父に濟まない。二人とも、誰にも言ふな。．．．．」

と鷹揚で、按摩と女房に目をあしらひ。

「私は羽織の裾を拂つて、

「違つたやうな、當つたやうだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山か。若布の附焼でも土産に持つて、東海道を這ひ上れ。

恩地の臺所から音信れたら、叔父には内證で、居候の腕白が、獨樂を廻す片手間に、此の浦船でも教へ

て遣らう。「
とずつと立つ。」

二十二

「痘瘡の中に白眼を剥いて、よた／＼と立上つて、
憤つた聲ながら、

「可懐いわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。
鬪らせて下され、つかまらせて下され、一撫で、撫
でさせて下され。」と言ふ。

いや、撫られて堪りますか。
摺抜けようとするんだがね、六疊の狭い座敷、盲
目でも自分の家だ。

素早く、階子段の降口を塞いで、無手と、大手を
擴げたらう。……影が天井へ懸つて、充滿の
黒坊主が、汗膏を流を流して撫でうとする。

いや、其の嫉妬執着の、險な不思議の形相が、今
以て忘れられない。

「可厭だ、可厭だ、可厭だ。」と、此方は夢中
に出ようとすする、よける、留める、行違ふで、やは
な、かぐら堂の二階中みし／＼と鳴る。風は轟々當
る。唯黒雲に捲かれたやうで、可恐しくなつた、凄
さは凄し。

衝と、引潜つて、ドンと飛び摺りに、どゞと駈
け下りると、ね。

「袖や、止めませい。」

と宗山が二階で喚いた。皺枯聲が、風ではつと耳
に當ると、三四人立騒ぐ女の中から、すつと美しく
姿を抜いて、格子を開けた門口で、しつかり掴まる。
吹きつけて揉む風で、颯と紅い褌が搦むやうに、私
に鎚つたのが、結綿の、其の娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の妾

だらう。

ものを言ふ清い、張のある目を上から見込んで、
構ふものか、行きがけだ。

「可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の
玩弄物にされるな。」

と言捨てに突放す。

「あれ。」

と云ふ聲がうしろへ、ぱつと吹飛ばされる風に向
つて、砂塵の中へ、や、躍込むやうにして一一散に
駈けて返つた。

後に知つた、が、妾ぢやない。お袖と云ふ其の可
愛いのは、宗山の娘だつたね。其れを娘と知つて居
たら、いや、その時だつて気が付いたら、按摩が天
下の謀叛人でも、私あ退治るんぢやなかつたんだ。」

と不意にがツくりと胸を折つて俯向くと、按摩の
手が、肩を這つて、ぬいと越す。・・・其の袖
の陰で、取るともなく、落した杯を探りながら、

「もしか、按摩が尋ねて來たら、堅く居らん、と
言へ、と宿のものへ吩咐けた。叔父のすや／＼は、

上首尾で、竝べて取つた床の中へ、すつぱり入つて、引被つて、可心持に寝たんだが。

あゝ、寝心の好い思ひをしたのは、其晩切さ。

何故ツて、宗山が其の夜の中に、私に辱められたのを口惜しがつて、傲慢な奴だけに、びしりと、もろい折方、憤死して了つたんだ。七七代まで流儀に祟る、と手探りにじり書した遺書を残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だつた。あの廣場の雑樹へ下つて、夜が明けて、漸ツと小止に成つた風に、ふら／＼とまだ動いて居たとき。

此方は何にも知らなからう、風は凪ぐ、天氣は可。叔父は一段の上機嫌。朝の中、朝日館と云ふのへ入つて、二見へ行つた。朝の、朝日館と云ふのへ入つて、いづれ泊る、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二二見の浦の上を通つて、日和山を棧敷に、山の上、海を青疊にして二人で半日。やがて朝日館へ歸る、と何うだ。

旅籠の表は黒山の人ばかりで、内の廊下もごつた

返す。大袈裟な事を言ふんぢやない。伊勢から私たちに逢ひに来たのだ。按摩の變事と遺書とで、其の日の内に國中へ知れ渡つた。別に其の事について文句は申さぬ。藝事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謠が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたらう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不處存もの、思地源三郎が申渡す、向後一切、謠を口にする事罷成らん。立處に勘當だ。さて宗山とか云ふ盲人、己が不束なを知つて屈死した心、斯くの如きは藝の上の鬼神なれば、自分は、葬式の送迎、墓に謠を手向けう、と人々と約束して、私は其の場から追出された。

あとの事は何も知らず、其の時から、津々浦々をさすらひ歩行く、門附の果敢い身の上。」

「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあつたを工面したのがはじまりで、一錢二錢、三錢ぢや木賃で泊めぬ夜も多し、日數をつもると野宿も半分、京大阪と經めぐつて、西は博多まで行つたつげ。何んだか伊勢が氣に成つて、妙に急いで、逆戻りに又來た。・・・」

私が言つた唯一言（人のおもちやに成るな。）と言つたを、生命かけで守つて居る。・・・可愛い娘に逢つたのが一生の思出だ。何う成るものでもないんだから、早く影をくらましたが、四日市で煩つて、女房さん。」
と呼びかけた。

「お前さんぢやないけれど、深切な人があつた。漸と足腰が立つたと思ひねえ。上方筋は何でもない、間違つて謠を聞いても、お百姓が、（風呂が沸いた）で竹法螺吹くも同然だが、東へ上つて、箱根の山

のどてつばらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、何う我慢が成るものか！ うつかり謠をうたひさうで危くつて成らないからね、今切は越せません。これから大泉原、員辨、阿下岐をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら飛騨越で、北國筋へも廻らうか知ら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ來たのが昨日だった。

其の今夜は何うだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなつて此家へ飛込んだ。が、流の笛が身體に刺る。平時よりは尚ほ激しい。其處へ又影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も見た。此處で按摩が殺す氣だらう。構ふもんか、勝手にしろ、似たものを引つけてと然う覺悟して按摩さん、背中へ掴つて貰つたんだ。

が、筋を抜かれる、身を窶られる、私が五體は裂けるやうだ。」

と又差俯向く肩を越して、按摩の手が、其れも物に震へながら、はた／＼と戦きながら、背中に獅噛んだ面の附着く……門附の袷の褪せた色は、

膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るやう、あはれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛一つ搦みついたやうに凄く見える。

「誰や！」

と、不意に吃驚したやうな女房の聲、うしろ見られる神棚の灯も暗くなる端に、べろ／＼と紙が濡れて、門の腰障子に穴があいた。其れを見咎めて一つ喚く、とがた／＼と、聲音高く、駈け退いたのは御亭どの。

いや、因つた親仁が、一人でない、薪雜棒、棒千切れで、二人ばかり、若いものを連れて居た。

「御老體、」

雪叟が小鼓を緊めたのを見て……恚う言つて、恩地源三郎が儼然として顧みて、

「破格のお附合ひ、恐多いな。」

と膝に扇を取つて會釋をする。

「相變らず未熟でござる。」

と雪叟が禮を返して、其のまゝ座を下へおりんとした。

「平に、其れは。」

「いや、蒲團の上では、お流儀に失禮ぢや。」

「は、其の娘の舞が、甥の奴の倅ゆゑに、遠慮し

た、では私も、」

と言つた時、左右へ、敷物を齊しく芻ねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二聲呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思ふぞ。喜多八の叔父

源三郎ぢや、更めて一さし舞へ。」

二人の名家が屹と居直る。瞳の動かぬ氣高い顔し

て、恍惚と見詰めながら、よろ／＼と引退る、と黒

髪うつる藤紫、肩も腕も嬌娜ながら、袖に構へた扇

の利劍、霜夜に聲も凜々と、

「……引上げ給へと約束し、一つの利劍を

抜持つて……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の胴に光さし、艶が添

つて、名譽が籠めた心の花に、調の緒の色、颯と燃

え、ヤオ、と一つ聲が懸る。

「あつ、」

とばかり、屹と見据ゑた――能樂界の鶴な

りしを、雲隠れつ、と惜まれた――恩地喜多八、

餛飩屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！ 鼓を打つ！」と身を揉ん

だ、胸を切めて、慌しく取つて蔽うた、手拭に、か

つと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を掴ん

で、按摩の手を緊乎と取つた。

「崇らば、崇れ、さあ、按摩。湊屋の門まで来い。

最う一度、若旦那が聞かして遣らう。」

と、引立て、ずいと出た。

「（源三郎）……かくて龍宮に至りて宮

中を見れば、其の高さ三十丈の宝塔に、彼玉をこめ

置、香花を備へ、守護神は八龍並居たり、其外悪魚

鰐の口、遁れがたしや我命、さすが恩愛の故郷のか

たぞ戀しき、あの浪のあなたにぞ……」

爾時、漲る心の張に、島田の元結弗つと切れ、肩

に崩るゝ緑の黒髪。水に亂れて、灯に揺めき、疊の

海は裳に澄んで、塵も留めぬ舞振かな。

「（源三郎）……我子は有らん、父大臣も
おはすらむ……」
と聲が幽んで、源三郎の地謠ふ節が、フト途絶え
ようとした時であつた。

此の湊屋の門口で、爽に調子を合はした。……
・其の聲、白き虹の如く、衝と來て、お三重の姿
に射した。

「（喜多八）……さるにても此のまゝに別
れ果なかなしさよと、涙ぐみて立ちしが……

・
」

「やあ、大事な處、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よるめく三重の背を支
へた、老の腕に女浪の袖、此の後見の大磐石に、み
るの緑の黒髪かけて、颯と翳すや舞扇は、銀地に、
其の、雲も戀人の影も立添ふ、光を放つて、灯を白
めて舞ふのである。

舞まひも舞まうた、謠うたひも謠うたふ。はた雪せつ叟そうが自得じとくの秘ひ曲よくに、桑く名はなの海うみも、トトと大鼓おほかの拍子ひやうしを添そへ、川浪かはなみ近くちかタタと鳴なつて、太鼓たいこの響ひびに汀みぎはを打うてば、多度山たどさんの霜しもの頂いたゞき、月つきの御在ござい所しよヶ嶽たけの影かげ、鎌かまヶ嶽たけ、冠かむりヶ嶽たけも冠かむり着きて、客座きやくざに竝ならぶ氣勢けいせいあり。

小夜更さよふけぬ。町凍まちいてぬ。何處どことしもなく虚空おほそらに笛ふえの聞きこえた時とき、恩地喜おんちき多八たはちは唯一たゞひとり人ひと、湊屋みなとやの軒のきの蔭かげに、姿すがた蒼あをく、影かげを濃こく立たつて謠うたふと、月つきが棟高むねたかく廂ひさしを照てらして、渠かれの面おもてに、扇あふぎのやうな光ひかりを投なげた。舞まひの扇あふぎと、うら表おもてに、其處そこでぴたりと合あふのである。

「(喜多八)・・・又思切またおもひきつて手てを合あせ、南な無むや志渡寺しどてらの觀音くわんおん薩さつの力ちからをあはせてたび給たまへとて、大だい悲ひの利劍りけんを額ひたひにあて、龍宮りゅうぐうに飛とび入いれば、左さ右うへはつとぞ退のいたりける、」

と謠うたひ澄すましつゝ、
「背せを貸かせ、宗山そうざん。」と言いふとゝもに、恩地喜おんちき多八たはちは疲つかれた状さまして、先刻さつきから其その裾すそに、大おほきく何なにやら踞うづくまつた、形かたちのない、ものゝ影かげを、腰掛こしかくるやう、取とつて引敷ひしくが如ごとくにした。

路一筋みちすぢ白しろくして、掛行燈かけあんどんの更ふけた彼方かなた此方こなた、杖つゑを

支^ついた按^{あん}摩^まも交^まつて、ち^ら／＼と人^{ひと}立^たちする。

【完】